

仮想心性の構築 (2)：照応，指示，省略*

(平成5年11月30日 受理)

人文・社会・語学・
体育教室 (英語) 清水 眞

The Construction of Virtual Mentality (2): Anaphora, reference, and ellipsis

Makoto SHIMIZU

0. はじめに

清水 (1993) は、認知的な視点に基づいたモデルを構築し、透明／不透明に関する問題を包括的に記述，説明した。この論文では、さらに他のタイプの現象である、照応，指示，省略にそのモデルの適用を拡げ、多くの事象を統一的に取り扱うことを試みる。

以下、次のように論をすすめたい。まず、1節では、束縛理論を意味的な概念を用いて修正しようという最近の研究を批判的に概観し、その問題を指摘する。次に2節では、その研究では言及されていないものの、その研究の枠組みでは問題となりそうな現象を指摘する。さらに3節では、問題の解決に必要なのは、概念的な要因である概念／意味構造ではなく、認知的な知覚の関与者であることを論じる。4節では、実際にモデルを用いて、分析する。5節でまとめを行う。

分析の枠組みとして用いるのは、Leech (1980) のスピーチアクトの語用論的分析 (pragmatic analysis of speech act), Fauconnier (1985) のメンタル・スペース (Mental Spaces), Sells (1987) の談話表示構造 (Discourse Representational Structure) を融合して作ったモデル、仮想心性 (Virtual Mentality) である。資料は、個人的に収集したもの、OCR で入力したものに付け加え、Lancaster-Oslo/Bergen Corpus (以下 LOB と略), Brown Corpus (以下 Brown と略), London-Lund Corpus (以下 LL と略) 等のコンピュータ・コーパス、Gutenberg Project の Server より ftp で get したものをを用いる。見やすさのため、当該の表現は例文中で斜字体とした。

1. 概念構造による分析

Chomsky (1981) の唱える束縛理論に問題が多いことは清水 (1987, 1988, 1990) でも指摘してきた。Jackendoff は、まず統語論と意味論を対応させる対応規則 (correspondence rule) を設定する。名詞句が名詞句を束縛するというのではなく、名詞句に対応する

THING という概念的な項が別の名詞句に対応する項を束縛し、ふたつの項には同じ指標が付与されているというものである。そして(1)のように束縛理論を修正する。

- (1) 条件 A_{cs} : 照応形は束縛されなければならない。潜在的な束縛は、次のいずれの条件をも満たした場合にのみ容認可能である。
- i) 統語的コンテキストによって決定された統語領域 D_{ss} に先行詞が存在する。
 - ii) 束縛変項の概念構造コンテキストによって決定された概念構造領域 D_{cs} に束縛される項目が存在する。

(1)に関する制約にはいくつかが想定されているようである。(2)はそのうち統語的な制約である。

- (2) 照応詞は、同一の最小統率範疇内の先行詞の右側になければならない。

c-統御による制約を排し、線形順序による制約に戻ったと言えよう。(3)は意味的な制約である。

- (3) 束縛変項は、それを束縛する要素よりも概念構造的に優位であってはならない。

これによって、(4)のふたつの読みの容認度に違いがあることが説明できる。

- (4) Ringo fell on himself.

本物のリング・スターが、自分そっくりの人形に倒れかかったという読みと、自分そっくりの人形が、本物のリング・スターに倒れかかったという読みである。Jackendoff (1992: 5)によれば、前者は容認可能であるが、後者は容認不能である。これは、Jackendoff (1992: 23)の説明では、(5a, b)に見られる概念構造の違いによる。

- (5) a. [GO ([RINGO]^a, [TO ON ([REPRESENTATION([a])]])])]
 b. [GO ([REPRESENTATION([RINGO]^a)], [TO ON ([a])])]

(5a)では、束縛する要素 RINGO が束縛変項 α より、概念構造的に優位である。すなわち RINGO は関数 GO の直接の項であるのに、束縛変項 α は構造の深い位置に埋め込まれている。これに対し、(5b)では、束縛変項 α が束縛する要素 RINGO より、概念構造的に優位である。よって、(3)への違反となる。

さて、この Jackendoff による束縛理論の修正案であるが、c-統御による制約を排し、意味的な側面を考慮する方向に踏み出したという点では評価できるものの、いくつかの問題を有している。まず、第1点は、決定的なデータいくつかの容認度に疑問点が残るということである。例えば、Russell (pers. com.)によれば、(4)は後者の読みも可能である。

とすれば, Jackendoff の言うように構造的にふたつの読みを区別する必要はなくなる。

再帰形の先行詞には, 作品タイプとでも呼ぶべきものが存在する。例えば, 名詞 (代名詞) の所有格が, 料理, 芸術作品, 議論等を表わす名詞を修飾しているものである。その名詞句がその作者を比喩的に示している, と考えることができる。例えば, (6) の中では, 演技が, その演技者の換喩となっている。

- (6) The world knows him as an actor and a writer, but Peter Ustinov's friends say that his greatest work of art is *himself*. "Nothing he creates is as funny as *himself*," says one friend. "One hour of him is better than two hours of his work."
Laird, Elizabeth (1986) *Faces of Britain*, London: Longman, p. 75

このような例の場合, 先行詞となる his や he は, 関数の直接的な項とはなりえない。

次に場面指示的な要素の記述に無理がある。話者と聴者などであるが, Jackendoff のアプローチでは(7)のようになる。

- (7) I talked to Ringo about himself.
[CAUSE ([I], [GO [INFORMATION [α]], [TO [RINGO] α]]]

I という表現は代名詞である以上, he や himself のと同じように定項と同一指標を与えられた変項で与えられるかと思えば, そうではなく, I があたかも定項のように取り扱われている。しかし, これでは this/that/now/here も定項として認めねばならなくなる。I のかわりに, the speaker という定項を想定すればよい, という議論が出てくるかもしれない。しかし, この場合も問題がある。文中, 談話中に the speaker という表現が出てきているわけではないからだ。話者というのは会話における役割であって, 定項ではない。言ってみればそれ自体が変項なのである。話者といっているわりには, 発話という概念が欠落しているようである。

清水 (1993) は, Jackendoff の透明/不透明の取扱に関して, 話者指示的動詞の補文の記述は抽象的な概念構造には帰することができない, という洞察が Jackendoff の仮説には欠けている, と指摘している。同じことが Jackendoff の再帰形の記述にもあてはまる。ただ単にどの項とどの項がどのレベルで同じ指示指標を与えられているかということだけではなく, 誰が言ったり, 考えたりしたのか (あるいは, 誰が言ったり, 考えたりしたとされているのか) ということを見極めなければならない。

なるほど, 発話状況と談話の間にはもちろん区別があるし, また一応の区別はせねばならない。しかし, もし両者の間になんら, あるいはほとんど関係がないというのなら, 何故同じ表現を用いることができるのかという疑問が湧く。

Lyons の指摘するとおり, 3人称代名詞でさえ, 場面指示的な用法が存在するのである。(8) は, 例えば, 部屋に入ってきた男性を指差しながらの発話である。発話状況から意味構造に指示対象を導入するなんらかの工夫でもない限り, Jackendoff の表記では, (8) は記述できない。

- (8) For heaven's sake, *he's* grown a beard! Lyons (1977: 664)

he と言いながら指差した時点で外的なものから内的なものに変わり、談話の内部に取り込まれたのである。

他の GB 論者同様, Jackendoff もまた英語の長距離束縛を認めていない。ここでは詳しく論じないが, 清水 (1987, 1988, 1990) は, 英語にも長距離照応が存在すると考えられることを, 反例を挙げて論じている。下にさらなる例をあげる。

- (9) a. I persuaded John that Mary would be well-disposed towards *himself*.
 b. John told me that Mary's remarks had been directed against *himself*.
 Cantrall (1974: 43)

- (10) From his file, Butterworth knew the archivist was younger than himself, but he vainly felt that if they had been seen together, no one would have believed it.
 Jeffrey Archer, *Honour Among Thieves* p. 115

(10)において, *himself* で指示される人物は, the archivist ではなく, Butterworth である。

GB 論者達の言うところの長距離束縛は, 実のところせいぜい中距離束縛とでもいうべきものである。真の長距離束縛は, 文の境界を越えるものである。しかも, その先行詞のあり方が一様ではない。例えば, 清水 (1987, 1988, 1990) で指摘した, 先行詞が前文のなかにあるものもあれば, (11)のように前文 (の表わす命題) が先行詞というものさえある。

- (11) It is true that, whatever happens, the Germans look like being left with a divided country, in *itself* a dangerous situation, but, as has been said many times before, it is the Germans themselves who are at the root of all these problems and they must be satisfied with whatever terms their conquerors feel are necessary to maintain the peace of the world spiritual values. (LOB B17 44)

GB 論者達も Jackendoff (1992) も, いずれのタイプも説明できないのである。

2 統語的振舞い

さて, 1 節では Jackendoff (1992) の考え方の不都合な点を見てきた。この節では, Jackendoff (1992) の中では直接議論されていないが, 彼の枠組みで分析すると問題になるであろう例を指摘し, 議論をすすめたい。最初の問題は, 束縛理論の条件 A, B に関する。(12)は先行詞が照応詞を束縛しているので Chomsky の理論の反例とはならないし, Jackendoff の線状順序を用いる考え方でも問題とはならない。

- (12) The physical cloud in the sky is just *itself*, made of water-drops. (LOB F01 139)

しかし, 統語構造が全く同じである (13) においては, 条件 A にあう (a) が非文である。反対に条件 B に違反する (b) が容認されるという判断が示される。

- (13) a. *) The best person for the job is *myself*.
 b. The best person for the job is *me*. George Rusell (pers. com.)

(14) は条件 C への反例である。

- (14) Feelings like happiness, and sadness, anger, and love. They make a person a person. My Sesame Street Home Video 5: *I'm Glad I'm Me*, Sony Vido Software

Larson (1988) のように関節目的語と直接目的語の間に統語構造上の階層を認めたにしても, ふたつめの a person がひとつめの a person に束縛されてしまう。Jackendoff の考え方で, ふたつめの a person を REPRESENTATION とするような工夫が必要になってくる。

(15) のような環境のふたつめの名詞句においては, 束縛理論では, 不定詞の前に PRO を想定するので, 束縛されることになり, 照応詞を予測する。事実, (15b) は容認可能である¹⁾。

- (15) a. I had to work for six months, you see, to get *me* over this winter.
 (LL-2-13 290)
 b. I had to work for six months to get *myself* over this winter.

しかし, 同様に (15a) のような代名詞形も容認可能である。

さて, ここで副詞句と条件 B, C 間の関係について考察してみたい。時の従属節を導く従属詞 when, r-表現 John, 代名詞形 he を前後に配し, 指示表現に関しては繰り返しが認めて組み合わせると, その理論的組み合わせは, 8通りである。同一指示でない解釈は除外する。束縛理論に基づいてその容認度を予測すると (16) のようになる。

- (16) a. John looked up when he came in.
 b. John looked up when John came in.
 *) c. He looked up when John came in.
 *) d. He looked up when he came in.
 e. When he came in, John looked up.
 *) f. When John came in, John looked up.
 g. When John came in, he looked up.
 h. When he came in, he looked up.

(16b, f) の容認度については, 統語論の問題というよりも文体, 談話の問題ではないかと

思うが、ここでは議論しない。(16c)が容認不能という判断にも異論がないのでここでは取り上げない。(16a, d, g, h)には容認可能という予測がたつし、事実、実際のデータを調べてみても、頻繁に遭遇する例である。

さて、ここで強調したいのは(16e)のタイプの頻度である。なんと驚くことに、200数十万語のデータ中にひとつの例も見つからなかった。使用したのは、LOB, Brown, 「赤毛のアン」, 「オズの魔法使い」である。LOB, Brown はそれぞれ約100万語であり、うちwhenの頻度はそれぞれ、2544回と2331回である。更にLOBについて言えば、15ジャンルすべてで、全500テキスト中485テキストに出現している。うち文頭に来ているものは472である。にもかかわらず、(16e)のタイプは一度も出現しなかった。しかし、GB論者のみならず、(16e)のタイプを容認可能とする英語の母国語話者は少なからず存在する。これはいったい何を示すのであろうか。

データがあつての推論ではないので、断定はできないのであるが、(16e)のタイプの代名詞形と同一指示指標をつけるべきは、同一文中のr-表現ではなくて、前の文(あるいは談話)中のr-表現なのではないだろうか。文体的にはかなり特殊な例であると考えられるかもしれない。仮にそうであるとすると、heは前の文(あるいは談話)中のr-表現の指示対象を指示しているのであって、同一文中のr-表現にc-統御されているのではないのだろうか。これは、線形順序を用いた分析でも問題になるのではないだろうか。

3. 仮 想 心 性

3.1. 仮想心性の必要性

さて、これまでさまざまな例を上げて、統語的、概念構造的には同じ構文でも、容認度に違いがあることを見てきた。それでは、このような違いは何に帰着させればよいのであろうか。

まず、考えなければならないのは、表現としては、例えば、同じ代名詞形でも、指示対象が異なるということである。(17)を見てみよう。

- (17) a. Do you know him? Yeah, he's my friend.
 b. Do you know about him? No, what happened?
 c. Do you know of him? No, is he famous?

もちろん、他動詞の目的語、前置詞 of の目的語、前置詞 about の目的語という違いはあるものの、形としては同じ代名詞 him である。しかし、(17a)では話題になっている人物の人格、性格、(17b)ではその人物に関する出来事、(17c)ではその人物の地位、特性が問題となっている。(18)はその人物の性格、属性などである。

- (18) a. I'm glad I'm me.
 b. You should be glad that you're you.
 My Sesame Street Home Video 5 I'm Glad I'm Me, Sony Video Software

(19) は特に興味深い。

(19) I don't remember about me. Total Recall

(19) は、映画 Total Recall の主人公 Doug の台詞である。Doug は、火星の植民地では反乱組織のリーダー Hauser であったのであるが、火星の政府に捕らえられて記憶を消され、Doug の記憶を植え付けられて、地球に連れて来られた。かつての同士に昔のことを告げて言った言葉である。ここでは、I と me の指示対象は明らかに違う。前者は Doug であり、後者は Hauser である。つまり、me の指示対象は、myself の指示対象と異なり、かつて火星にいた Hauser であり、Doug が「自分自身」と認識している Doug ではない。このように通常では同一の対象物を指示すると考えられるふたつの表現さえ、状況によっては異なる指示対象を有し得る。

逆に異なる指示表現が同一の（あるいはなんらかの関連のある）指示対象を有すると考えられる場合もある。

(20) "Are you a friend of the deceased?"

"No. She's me." Roald Dahl

(20) は葬儀屋と幽霊の間の台詞である。she は死者、me は幽霊を指示する。以上の例から、ふたつの代名詞形は、Fauconnier (1985) 流に言えば、異なるメンタル・スペースに属すると考えるのが妥当である。

次に再帰形の例を検討してみよう。例えば、x is y のような構文で $x=y$ である際、自分が自分であるのは自明であるのに、わざわざ y に再帰形を使うのは何故か。例えば、(21) である。

(21) The whale, etc., were in the minds of Hamlet and Polonius. But they could both see the cloud. Thus an image of the cloud was also in their minds. Moreover they knew it to be a cloud. Yet they could "see" animals in it. This is the important fact about mental phenomena. The physical cloud in the sky is just *itself*, made of water-drops. The mental cloud is a multiplicity. (LOB F01 139)

物理的な雲と心理的な雲を比較していることがわかる。比較を行うときには、視点 (Point of View) という概念がしばしば関連する。(6) にあげた作品のタイプも、視点が関係する。しかも、作品が作者の換喩となっていた。(22) も同様な例である。

(22) Since Laos is of no more purely military value to Moscow *itself* than it is to Washington, this approach might be expected to head off Mr Khrushchev for the moment.

(Brown B02 1370)

単なる地理的、物理的な都市ではなく、政治機構の換喩であることがわかる。

一般に客観的と考えられている自然科学関係の著書でさえ、視点から無縁ではない。(23)は科学エッセイの一部の抜粋であるが、議論を進めていく上で、仮想上の対話を想定している。斜字体の部分が想定された対話者の応答である。

- (23) IRAS detected infrared radiation from the star Vega. *In itself, this is not surprising, for just all stars including our own Sun radiate copiously in the infrared. Vega, twenty-six light-years away, is the fifth brightest star in appearance. In actual fact, it is twice as large as the Sun and shines sixty times more brightly, so why shouldn't it send out lots of infrared radiation?* The catch is that even allowing for Vega's size and brightness, the infrared radiation was far more intense than expected.

Issac Asimov *The Robot As Enemy? and Other Science Essays*, Kinseido, p. 65

以上の例からわかるように、再帰形の分析には、Sells (1987)の言うところの SOURCE, SELF, PIVOT, 等の意味役割を想定するのが妥当である。清水 (1990) は、Sells (1987)の提唱する DRS の枠組みで、再帰形の分析を行っている²⁾。

3.2 仮想心性の修正

清水 (1993: 50-2) では、スペース導入表現を、順行スペース導入表現と逆行スペース導入表現とのふたつに区分した。よって、順行スペース導入表現は、典型的には現実のスペースにあり、例えば、Steve believes という表現のように、埋め込まれた MS を開く。順行スペース導入表現は、外側のスペースにあり内側のスペースに焦点を移すスペース導入表現、と定義された。これとは逆に内側のスペースにある要素が、外側のスペースを導入するものを、逆行スペース導入表現と定義した。同一文中に先行詞が存在しないのに、単独で用いられる再帰形³⁾、文脈的なスペース導入、文副詞、挿入句を例してあげた。先行詞となるべき言語表現が存在しない場合、単独で用いられる再帰形は逆行スペース導入表現として機能し、外側のスペースを開く。

この逆行スペース導入表現について、伝 (pers. com.) より用語に混乱がみられるという批判が寄せられた。単独で用いられる再帰形、文脈的なスペース導入は逆行スペース導入表現と呼んでいいのかもしれないが、挿入句を逆行スペース導入表現と呼ぶには問題があるのではないかという指摘である。

- (24) a. John thinks Kim said David was coming.
b. John thinks, Kim said, David was coming.

例えば、(24b)にみられる挿入句の場合、“Kim said”を埋め込まれた内側のスペースとみるべきではなく、むしろ、(24a)のような順行スペース導入表現が、たまたま通常とは違う位置に出てきた、とみるべきである。逆行スペース導入表現の定義が先にあげたものから、「文(談話)中でスペース導入表現に先だって、内側のスペース内の命題の構成要素が現れる場合、そのスペース導入表現を逆行スペース導入表現と呼ぶ」に変わってしまう

ている。この定義には問題がある。日本語の命題態度動詞はその命題内容よりも後に出現するので「言う」、「思う」、「信じる」などがすべて逆行スペース導入表現になってしまう、という反論である。

確かにこの批判は妥当である。逆行スペース導入表現のより明確な定義を行わない限り、用語に混乱がみられるという議論に反駁できない。そこで、ここでは、以下のようにスペース、スペース導入表現、逆行スペース導入表現の定義を精密化する。

はじめに、任意のふたつのスペースの間に成立する関係を間スペース関係と呼ぶ。さらに、この間スペース関係を2種類に区別する。まず、ふたつが隣り合う関係を隣接関係と呼ぶ。前のスペースを先行スペース、後ろのスペースを後続スペースと呼ぶ。情報の流れという点からすると、先行スペースが後続スペースより優位である。先行スペースから後続スペースを結ぶものを、隣接関係順行スペース導入表現と呼ぶ。次に、一方だけ他方を含む関係を包含関係と呼ぶ。含むほうを外スペース、含まれる方を内スペースと呼ぶことにする。外スペースが内スペースよりも優位である。外スペースが内スペースを導くものを、包含関係順行スペース導入表現と呼ぶ。理論的には、直に隣接する、包含するという直接的な関係と、そうではなく、間に他のスペースを介在する間接的な関係の両方が考えられるが、ここでは前者のみを考察する。

こう考えると、(24a)においては、John thinks, Kim said, David was coming の順に外スペースであり (以下 John thinks>Kim said>David was coming の様に表記)、しかも、John thinks, Kim said, David was coming の順に先行スペースである (以下 John thinks->Kim said->David was coming の様に表記)。ところが、(24b)においては、John thinks->Kim said->David was coming であるのは(24a)と同じであるが、(24a)と異なり、Kim said>John thinks>David was coming である⁴⁾。よって、Kim said は、包含関係順行スペース導入表現ではあるものの、隣接関係順行スペース導入表現であるということになる。

4. 仮想心性による分析

さて、いよいよ仮想心性による、照応，指示，省略の分析に移ることにする。まず、指示から考察したい。典型的な指示とは、指示詞によって、発話状況にある指示対象を指すことであろう。外スペース R から、スペース内への取り込みと考えたい。

(25) (リンゴを指差して) Can I have this?

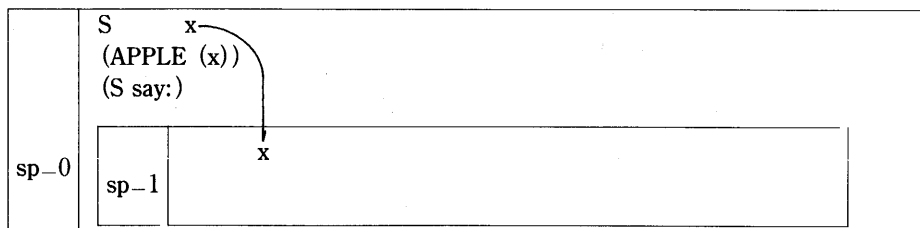


図-1

これに対して、典型的な照応とは、先行スペース内に指示対象があるものである。

- (26) A: I saw John yesterday.
B: I just love him.

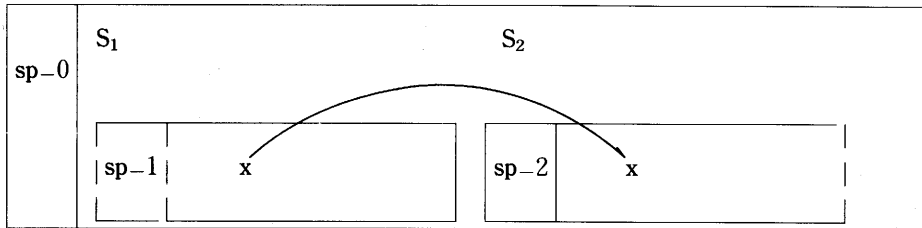


図-2

1, 2 人称の人称代名詞は通常、指示詞のような振舞いを見せるのだが、(27)は面白い例である。

- (27) a. I like me.
b. I have to think about me.

George Russell (pers. com.) によれば、(27)は最近よく観察される例であり、再帰形を用いられる例よりも、強調的である。これは、(28)と比較すると興味深い。通常、再帰形の現われる(28)は、代名詞形の現われるものよりも強調的であると言われているからである。

- (28) So that morning, Vadim, Gorin and myself set out on foot to discover a typical Soviet cinema. (LOB G49 35)

清水 (1990) は、視点という要因の入った枠組みで、再帰形の分析を行っているが、(27)はむしろ、意図的に視点を排除している。特に(27b)は、あたかも、me で表わされる指示対象について考えなければならないことは、客観的な、普遍の事実として取り扱っているかのようである。分析は次のようになる。

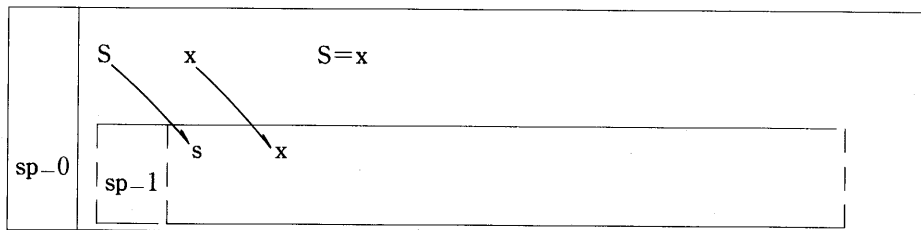


図-3

図-2 と図-3 を併せたようなを持つと考えられるのが, (29b)である。

- (29) a. I'm blaming myself.
 b. 'Dad, I'm not blaming you.'
 'Well I'm blaming me then.'

Webb, Charles (1968) *The Graduate*, Harmondsworth: Penguin p. 68

談話の理解においては, 前提というものは完全な文によって表わされる命題のレベルでのみ成立するのではなく, 個々の表現で表わされる項等のレベルで成り立つ, という考え方である。よって, John came here yesterday という文に遭遇した時点で John という人物の存在を前提とするのみでなく, John という名詞句に遭遇した時点でも John という人物の存在を前提とすることができる。もちろん例外はあるものの, 日常の会話のレベルでは, 文の発話が完結してしまった時点より, むしろ個々の表現に遭遇した時点において推論することのほうが普通ではないかと思われる。

通常は主語である名詞句が先に発話される。言語のタイポロジーにおいて, 主語が目的語よりも後に来る言語が (ほとんど) ないのは偶然ではない。よって (29a) のように目的語が再帰形となる。しかし, (29b) の文脈においては, 事情が異なる。はじめに発話された Ben の台詞に blaming you という表現が出てきているので, 次の父親の台詞の中の I という表現によって父親の存在が前提とされるよりも先に, 「誰かが父親を責めている」という前提ができてしまった。清水 (1990: 54) では, DRS を用いた分析を行っている。表記の仕方はやや異なるが, 異なるスペースに指示対象を持つという考え方は同じである。

推論の仕方は異なるものの, (30) も類似した構造を持つと考えられる。

- (30) Tom: Can I talk to Mr. Russell?
 George: I'm him⁵⁾. Bradley (pers. com.)

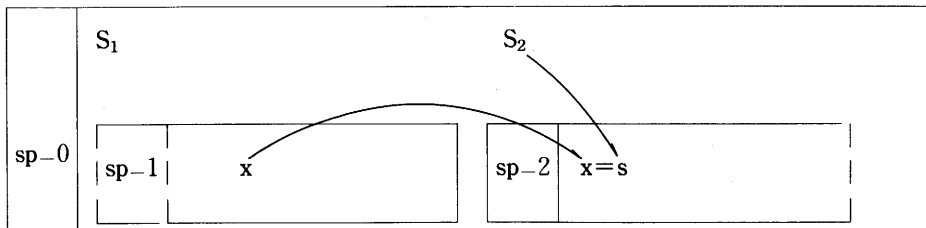


図-4

さて, 省略であるが, これはスペースを複製して, 必要最小限のものを上書きしたときと考えたい。

- (31) John hit the wall, and so did Pete.

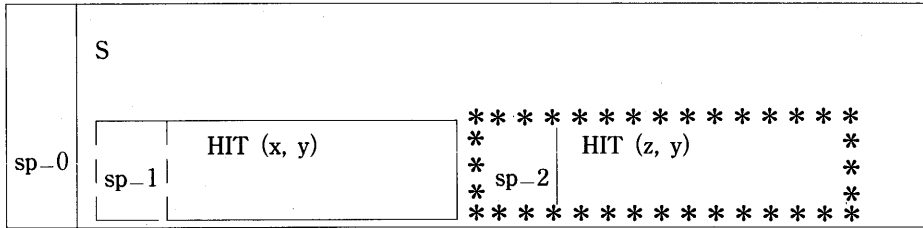


図-5

この分析には、他にもいくつかのメリットがある。通常は別個の問題とされているものも、統一的に取り扱うことができることである。まず、間投詞、vocative は通常、指示の問題とは切り離して考えられる。

- (32) a. おい、真里奈どこだ？
 b. おい、真里奈、どこだ？

しかし、ここではどのスペースで、どの指示対象と結合するのかを示すので同じように扱える。(32a)は sp-1 で x と、(32b)は sp-0 で H とである。

次に、時間や場所に関する表現も同じように処理できる。

- (33) a. Tim: Excuse me, can you tell me how to get to Sesame Street?
 Snuffy: You're here.
 b. You're there. *Sesame Street* '93⁶³⁾

(33a)では場面照応的に、つまり現実とその発話が行われている発話状況である sp-0 の pl₀ と Sesame Street が結合され、(33b)ではテキスト内照応的、つまり相手の発話内 sp-1 からの pl₁ と Sesame Street が結合されている。また、時間や場所を指示代名詞で指示することも説明できる。

5. お わ り に

以上、仮想心性により、照応、指示、および省略等を分析してきた。通常は別個の問題とされている様々な種類の現象を、統一的に取り扱うことができる。

この論文では、主に人称代名詞、再帰代名詞、名詞句による照応、指示、および省略を見てきた。しかし、英語には他にも異なる類の現象がある。例えば、(34)である。

- (34) Robert had known theirs was one of the smaller apartments, as he looked at the striped sofa in the sitting room, the elaborate flower arrangement, the pieces of china displayed in alcoves—Dresden or Meissen, perhaps, but obviously valuable—he

realized fully that life in Malborough Court was something to which he and Barbara should not have aspired. He should have said *so*, have said *it* firmly.

Symons, Julian 'The conjuring trick' in Fujiwara, K. et al. (eds.) (1992) *Contemporary Crime Stories*, Eihosha, p. 13

ここで, *so, it* はどのような働きをしているのか, 両者にはどのような違いがあるのか, *it, so* の順番では容認不能となるが⁷⁾, それは何故か等は今後の課題としたい。

Reference

- CANTRALL, WILLIAM R. 1974. *Viewpoint, Reflexives, and the Nature of Noun Phrases*, Mouton, The Hague
- DINSMORE, J. 1990. 'Mental spaces as a theory of representation and language understanding', (坂原茂訳「表現と言語理解理論としてのメンタル・スペース理論」)『認知科学の発展3』, 153-207
- FAUCONNIER, G. 1985. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- JACKENDOFF, R. 1983. *Semantics and Cognition*, M.I.T. Press, Cambridge, Mass..
- . 1990. *Semantic Structures*, M.I.T. Press, Cambridge, Mass..
- . 1992. 'Mme. Tussaud Meets the Binding Theory' *Natural Language & Linguistic Theory* Vol. 10 No. 1, 1-31
- KUNO, S. 1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, Chicago University Press, Chicago.
- LEECH, G. N. 1980. *Explorations in Semantics and Pragmatics*, John Benjamins, Amsterdam.
- . 1983. *Principles of Pragmatics*, London, Longman
- SELLS, P. 1987. 'Aspects of logophoricity', *Linguistic Inquiry* 18, 445-79.
- 清水 真 1987 「機能文法における代名詞, 照応形の同一指示」『広島女学院大学論集第37集』75-95
- . 1988 「再帰形による同一指示の語用論的側面」『広島女学院大学論集第38集』33-50
- . 1990. 「談話表示理論による再帰形の記述」『九州工業大学研究報告 (人文・社会科学) 第38号』35-57
- . 1993. 「仮想心性の構築: 話者指示性と透明/不透明」『九州工業大学研究報告 (人文・社会科学) 第41号』43-55
- SPERBER, D. & WILSON, D. 1981. 'Irony and use-mention distinction', In *Radical Pragmatics*, Edited by Cole, Peter, Academic Press, New York

*) この論文を執筆するにあたり, ATR の伝康晴氏, 九州工業大学の George Russell 先生, Thomas Bradley 先生との議論から多くの有益な情報, 着想を得た。ここに感謝の意を表したい。本研究は, 平成5年度文部省科学研究補助金奨励研究(A)課題番号05851077の援助を受けた。

- 1) Thomas Bradley (pers. com.) は, *me* よりも *myself* の方が 'a little better and more formal' だが, それでも *me* も容認可能であるという判断を下した。
- 2) これまであまり言及されていないが, 再帰形, 代名詞形と関連づけて *one's own* の分布を調べ, 分析を行うことも必要かもしれない。
- 3) GB 理論の反例となる再帰形については, 清水 (1990) に詳しい議論がなされている。
- 4) 具体的なデータがないので, あまり強い主張はできないのだが, 日本語で対応する例は, 次の様になるのではないかと思う。

- (i) a. デビッドが来るとキムが言ったとジョンは思っている。
b. デビッドが来る, ジョンは思っているのだが, とキムが言った。
c. デビッドが来る, とジョンは思っているのだが, キムが言った。

(i a, b) は, 包含関係では英語の例と同じであるが, 隣接関係が英語と逆になる。(i c) は筆者の直感では容認可能であるが, 「デビッドが来る」という命題にたいして, ジョンの信念とキムの発話が全く独立して存在しているような場合である。清水 (1993) で論じた, 立体的なスペース関係と関連するものではないかと思う。このようなものを, 平行スペース導入表現と呼びたい。

- 5) Bradley (pers. com.) によれば, 他の可能な表現に, You're talking to him. (ややくだけた表現) This is he. (かたい表現) That's me. (くだけた表現) などがある。最後を除けば, すべて電話以外の場合にも用いることができる。
- 6) Bradley (pers. com.) によれば, どちらもおなじくらい一般的である。
- 7) Bradley (pers. com.) による。